

ボツリヌス治療

今回は脳神経内科で日本神経学会指導医・専門医の野元正弘医師に「ボツリヌス治療」で頭頸部・四肢・体幹のジストニア・痙縮治療」について伺いました。



▲野元 正弘 医師

斜頸や書痙は動作時に力が入ってしまい、書字で震えたり、頭が傾いたり、腕や体幹が震える病気で、緊張すると症状が強くなり、精神的な要因で悪化しやすいのですが、ストレスが原因となる病気ではありません。大脳の基底核という部分の機能異常によって起こります。治りにく

く治療に難渋する病気ですが、飲み薬では抗コリン薬（トリヘキシフェニジルなど）や中枢性筋弛緩薬が筋の緊張を和らげてくれます。また、過剰に収縮している筋肉にボツリヌス毒素という筋弛緩薬を注射すると緊張が和らぎ、姿勢異常や震えが改善します。注射薬の効果は3〜4ヶ月間続き、症状が強くなる場合は再度注射することができま

す。四肢の筋肉が必要以上に収縮する病気には、痙縮もあります。脳や脊髄で神経が障害されるために起こり、脳梗塞や出血の後、脳脊髄の炎症や変性疾患で起こります。上肢が屈曲して伸びにくくなり、下肢がつっぱり、痛みが起こることがあります。痙縮に対しては緊張が異常に高まっている筋を筋電図で確認してボツリヌス毒素を注射すると筋の異常収縮を改善させることができます。注射と同時に短期のリハビリテーションを組み合わせてみると効果が増します。ジストニアと同様に効果は3〜4ヶ月間持

続し、必要であれば再投与できます。また、四肢に対してはボツリヌス毒素のほかにインコボツリヌス毒素も使えるようになっていきます。



社会福祉法人

恩賜財団

済生会今治病院

今治市喜田村7丁目1番6号

<https://www.imabari.saiseikai.or.jp/>

0898-47-2500

